

[023]九州大学教育社会学研究集録表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/4773098>

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 23, 2022-03-15. Seminar of Educational Planning, Measurement, Evaluation, Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

三大学研究交流セミナー報告

本ゼミでは、筑波大学の田中正弘研究室、名古屋大学の丸山和昭・中島英博研究室と三大学合同で研究交流セミナーを行っている。今年は2021年8月29日(日)・30日(月)の二日間にわたって開催された。本来であれば発表者は島根大学で発表を行い、対面とオンラインを併用して開催する予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、昨年同様オンラインのみでの開催となった。九州大学、筑波大学、名古屋大学、京都大学の学生計9名が研究発表を行った。発表者と先生方の活発な議論は勿論、参加学生からも多くの質問や意見交換が積極的になされており、参加者全員にとって非常に有意義な時間となったのではないだろうか。

--発表者--

- 1 測れる学力/測れない学力の二項対立の学校社会学—資質・能力の測定可能性と教科学力の伸びの規定要因を巡る多変量解析— /高倉維 (九州大学修士2年)
- 2 インクルーシブ教育と通級指導担当教員の課題について /浜えりか (名古屋大学修士2年)
- 3 筑波大学教育学類生が経験したフィードバックに関する調査—FB が学生に影響を与える構図に着目して— /金沢拓也 (筑波大学学部4年)
- 4 国際バカロレア修了生の大学進学同期に関する研究—日本にルーツをもつ学生に着目して— /江端知佳 (筑波大学博士4年)
- 5 大学生の進路未決定を規定する要因—キャリアセンターの支援に着目して— /岡靖子 (九州大学博士5年)
- 6 林業大学校の現状とその教育内容/小川高広 (京都大学博士1年)
- 7 コミュニティカレッジにおける留学生受け入れ—Kinght の理論的根拠に着目して— /陣田内実 (名古屋大学博士2年)
- 8 地域移動と高等教育経歴による個人所得の差—中国版総合社会調査 (CGSS) のデータを用いて— /黄薇 (九州

大学修士2年)

9 フィンランドにおける高等教育質保証への学生参画の変容—80年代以降を中心に— /李月婷 (筑波大学博士1年)

--参加教員--

- ・木村拓也先生 (九州大学)
 - ・丸山和昭先生 (名古屋大学)
 - ・中島英博先生 (名古屋大学)
 - ・高森智嗣先生 (福島大学)
 - ・田中正弘先生 (筑波大学)
- (アルファベット順)

昨年度同様、完全オンラインでの開催となり、実際に顔を合わせて議論をすることができなかった点は非常に残念であったが、参加者それぞれの研究や教育に対する熱が画面越しに伝わってきた点は、実に印象的であった。発表者の研究関心は様々だったが、素朴な疑問から鋭い指摘まで、多くの意見が飛び交い、どの議論も非常に白熱していた。

最後に筆者自身の感想を述べる。今までは発表内容の理解や白熱する議論についていくことに必死であったが、三度目の参加となる今回の合同ゼミでは、研究を進めるにあたって気を付けるべきこと、大切にすべきことは何かを、参加者の発表や議論を通して学び取ることができたと感じる。研究を進めていくにあたって、ある考えが自らのものなのか、先行研究で言及されていることなのかを分けること、また、データや資料の整理を丁寧にまとめれば良いのではなく、研究の核となる自らのリサーチクエスチョンを持つことの重要性を特に実感した。

また、普段のゼミで共に議論をしていたゼミ生の研究が、一人で向き合う時間や、今回の合同ゼミのように研究分野や関心の違う人からの意見をいただく時間を経て、更に磨かれていく過程を目の当たりにし、様々な人や考えに触れながら研究を作り上げていくことの重要性を身

に染みて実感した。

新型コロナウイルスの感染が拡大し、他大学の人と交流する機会がかなり減少したからこそ、このような機会はとても貴重な。来年度以降、筆者自身は参加することはできないが、今後合同ゼミに参加する皆さんには、こ

の貴重な機会を存分に楽しみ、自らの研究に生かしていただきたいと思う。そして、いつの日か顔を合わせて活発な議論を行うことができる日が来ることを願っている。

(文責：学部4年 木村円香)